

草津市立矢倉小学校通信 令和4年2月16日 NO.18



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

学校の神さま

学校に神さまはいるのだろうか。

トイレには神さまがいて、心がきれいな人を幸せにするというし、野球場にも神さまがいて、奇跡のような試合運びを演出し人の心を動かすのだから、いても不思議ではないだろう。というより、いた方が、夢があっていいのではないか、そう思えてくる。つまり、神さまがいればおもしろいし、話もしやすいということだ。

そんな私には、気恥ずかしい話だけれど、学級担任だった頃、募金をケチろうとしてしまったことがある。

たしかそれは、探し物だかなんだかの用事で、校舎内を歩き回り、最後に昇降口に立ち寄ったときのこと。そこに、募金箱が置かれてあるのをみつけた。そういえば委員会の子が据えたものだと思う。子どもたちには、「できる範囲でいいから、気持ちよく募金ができるといいなあ、きっと神さまはそれを見てくださって、金額の多い少ないよりか、その気持ちを受けとめてくださる。前向きに取り組んでいこう…。」などと、偉そうに語っていた。そんなことを思い出し、さっそく募金しようと、小銭を入れていたポケットに手を突っ込み、取り出した。と、手の平にはなんと百円硬貨が3枚あった。待てよ、たかが募金。しかも放課後だ。子どもが見ているわけでもないし、さほど気合を入れなくてもいいだろう。三百円では多すぎる…と、再度、ポケットから小銭を取り出すことにした。実は、ポケットには、その日集金した小銭を、自分の財布にあったお札と両替した折の小銭、たくさんの十円硬貨を中心にじゃらじゃら突っ込んでいた。こうしてもう一度気合を入れて、ポケットから取り出してみると、なんとまた、百円玉3枚だった。これは何かのまちがいだと、よこしまな考えにとりつかれそうになった。が、百円玉を握りしめたその右手は、何者かに静かに引っぱられていくように伸び、軽い音を立てて募金箱の暗い底へ引き取られていった。

今は自信を持って言える…学校にも神さまはいると。あの時、私が最初にポケットから取り出したものを、神さまはそのまま受け取ってやろうとなさった。最初に、ポケットから取り出したものは、私という人間の、駆け引きのない、取り出したお金がどうぞ役に立ちますよという純な心であり、そこに神さまから「まさかおまえは見栄や体裁で募金をしたのではないだろうな。」と、そっと念を押し、気づかせる不思議な力を作用させていたのだと。

今も時おり思い出し、赤面している。

校長 大林 道範